

## 2021（令和3）年度 京都大学 入試問題 理系 第2問 解答例

### 問一

日本の日常語や散文のリズムが、乱雑、即興的、無方向で、生き生きと多彩で変化するのに反し、短歌の五七五七七という音数律は、特殊な形、組み合わせ方の定型であるという事実。

\*設問要求は「根拠は何か」であるから、筆者の判断根拠となる「何＝証拠事実」を指摘する。

\*当然ながら、傍線部を言い換えただけの「不自然」「超日常的」「人工の約束」などを傍線部の「根拠」と混同して解答要素としてはならない。

### 問二

定型の短歌詩型は、どの時代にも日常語の自然なリズムと対立、断絶し、また強引に接続するという困難な作業を要し、形の上から外的に非日常的な詩の世界を支えているから。

### 問三

茂吉は、彼の内面を厳密な短歌詩型の約束のもとで正確に表明するために最適な語を、知る限りの古今東西の文章語の文法的あるいは語彙上の蓄積に求めているということ。